

越後獅子

長唄

全詞章

松井幸三 作詞

九世杵屋六左衛門

作曲

文化八年（二八一）三月

江戸中村座

〔二上り〕 打つや太鼓の音も澄み渡り、角兵衛角兵衛と招かれて、居ながら見する石橋の、
浮世を渡る風雅者

諷ふも舞ふも囃すのも、一人旅寝の草枕

おらが女房を褒めるぢやないが、飯も焚いたり水仕事、麻撚るたびの楽しみを、独笑みして
来りける

越後がた

お国名物さまざまあれど、田舎訛りの片言交り、しらうさになる言の葉を、雁の
便りに届けて欲しや

小千谷縮の何処やらが、見え透く国の習ひにや、縁を結べば兄やさん、兄ぢやないもの
夫ぢやもの

〔越後の甚句・おけさ節〕 来るか来るかと浜へ出て見れば、のほいの、浜の松風音やまさる、
さやとかけのほい、まつがとな

好いた水仙好かれた柳、のほいの、心石竹気はや紅葉サ、やつかけのほい、まつかとな
辛苦甚句もおけさ節

何たら愚痴だへ、牡丹は持たねど越後の獅子は、おのが姿を花と見て、
庭に咲いたり咲かせたり

そこのおけさに否こと言はれ、寝まり寝まらず待明かす

御座れ話しませうぞ、こん小松の蔭で、松の葉のよにこん細やかに、弾いて唄ふや獅子の曲
むか 小山の篠竹、いた節揃へて切りを細かに、十七が室の小口に昼寝して、花の

盛りを夢に見て候

〔晒し〕 見渡せば見渡せば、西も東も花の顔、いづれ賑はふ人の山、人の山

打寄する打寄する、女波男波の絶間なく、逆巻く水の面白や、面白や

晒す細布手にくるくると、くるくると、いぎや帰らんおのが栖へ